にいがた文化の記憶館　「漂泊の俳人 井上井月」・
會津八一記念館　「芝蘭の交わり ～八一と麻青の書画～」　開催記念

ジュニア俳句大会 作品集

下島空谷筆《井月の面影》

何処（どこ）やら
に鶴（たづ）の声
きく霞（かすみ）かな
井月

AIZU YAICHI 會津八一記念館

NMMC Niigata Memorial Museum of Culture にいがた文化の記憶館

全体を通しての講評

選者 織田 亮太朗
（とねりこジュニア句会主宰、銀化同人）

今回のジュニア俳句大会について、投句数はやや少なかったものの、中には若々しい感性のきらりと光る句、大人の作品にも負けないような句があったことにとても感心しました。新潟らしい景色を詠んだ句、学生時代に戻ったような気分にさせてくれる句、若者ならではの視点や発見のある句等とても楽しく選句、講評させていただきありがとうございました。

若者達へのアドバイスとしては、「きれいだ」「うれしい」等の自分の思ったことや気持ちを述べることを優先する、単に「蟬は○○だ」と季語の説明をする、五・七・五で三コマ漫画を作るのではなく、モノや風景が相手の頭に浮かぶような作りにする、自分の気持ちを季語に託して表現する、一枚の写真のように風景を切り取る方が俳句的だと思います。ぜひそうした視点を持って、今後も若者にしかできない表現の探究を続けてほしいと思います。

また、俳句は必ず五・七・五で区切って書かなければならないというわけではありません。基本的には区切らず書くものとされています。正しい書き方をした方が上手な句が作れるようになると思うので、ぜひ今日から実践してみてください。

感性の若さはお金で買うことはできません。今、俳句の世界は大いに若者達の活躍に期待を寄せています。今回初めて俳句大会に応募したという方もぜひこれを機会に、今後も友達や学校の先生等と一緒に俳句を作り続けてほしいと思います。

また、みんなで俳句を持ち寄って選句、講評しあう「句会」も、楽しく上達できる近道です。俳句をもっと楽しみたいという若者の当句会への参加もお待ちしております。

にいがた文化の記憶館「漂泊の俳人―井上井月」・
會津八一記念館「芝蘭の交わり ～八一と麻青の書画～」展　開催記念
ジュニア俳句大会　入選作品集

平成 29 年 8 月 25 日 発行
編集・発行　にいがた文化の記憶館
〒950-0088　新潟市中央区万代 3-1-1　新潟日報メディアシップ 5 階
電話 025-250-7171　ホームページ http://www.nmmc.jp/
© 2017 にいがた文化の記憶館

【中学生の部】　入選

桜散る出会いと別れの登下校
新潟市立亀田西中学校　3年　小日向 咲子

白桃やしずくが落ちてわちゃわちゃと
新潟市立亀田西中学校　3年　古泉 愛菜

ランドセル背中いっぱい四月かな
新潟市立亀田西中学校　3年　生田 波美音

鮮やかに我が家にほしい大花火
佐渡市立畑野中学校　2年　中川 登真人

晩夏の風中途半端でなんか嫌（や）だ
長岡市立南中学校　1年　堀川 想太

【高校生の部】　入選

だるまさんころんで夕焼雲多し
新潟県立巻高等学校　3年　藤澤 拓也

夏濤（なつなみ）の模様に船はひかりけり
新潟県立巻高等学校　3年　藤井 海人

桜貝二枚拾いて妹に
就実高等学校　2年　鈴木 藍夏

出目金や商店街の風のなし
就実高等学校　2年　鈴木 藍夏

白鳥座父も見ている同じ空
東京学館新潟高等学校　2年　寺山 汀

【小学生の部】　大賞（該当なし）　入選（該当なし）

佳作

えだ豆がすごくおいしい新潟だ

横浜シュタイナー学園　5年　佐藤 陽亮

新潟の夏の味覚、枝豆。そのおいしさをストレートにトリビュート、賞賛できている。コマーシャルに使えそう。

【中学生の部】　大賞（該当なし）

佳作

夕立や君の影追い田んぼ道

新潟市立亀田西中学校　3年　吉澤 日向

突然降りだした夕立の中、友達と雨の当たらない場所まで走っていく景だろうか。君の影を追って田んぼ道を行く姿がドラマのワンシーンのようですがすがしい。

ゆううつな前髪事情梅雨曇

新潟市立亀田西中学校　3年　宮崎 あげは

梅雨の日の朝、洗面所で鏡を見ながらの景だろうか。思春期の若者特有のアンニュイな感覚がよく伝わる。ネガティブなことでも俳句になる。

ミツバチや命のカギを運びゆく

新潟市立亀田西中学校　3年　熊谷 愛菜

花は蜜を作り出す。蜜蜂はその花の蜜を運ぶ。蜜は巣に蓄えられ蜂蜜になる。そして蜂蜜は人間の手に渡って…といった自然界の「命のカギ」が運ばれていく様子が想起される。俳句は十七音であるが、十七音以上のストーリーを生みだすことがある。

【高校生の部】　大賞（該当なし）

佳作

風鈴の風に江戸始まるらしく

青森県立弘前高等学校　3年　吉沢 美香

「江戸風鈴」なるものもあるが、風に揺れる風鈴から江戸を想起したという感覚が面白い。「江戸始まるらしく」という言いきらない言い方も、現代的で想像の余地を残していて新しい。

円陣を大きく解き放つて夏

新潟県立巻高等学校　3年　藤澤 拓也

野球などのスポーツの試合開始の情景だろうか。円陣を組んでいた選手たちが、一斉にそれぞれのポジションへ走り出していく様子を夏と言いきった。大胆かつ若々しく、スポーツの夏の一瞬を切り取っている。

もののけのけはひのたのし糸桜

新潟県立巻高等学校　3年　藤井 海人

夜の糸桜の怪しげな様子を「ひらがな」と「の」のつく言葉の重複によって面白可笑しく表している。言葉遊びの効いたなかなかテクニカルな句。

星眼鏡抱え星河（せいが）と心中す

新潟県立巻高等学校　3年　星 彩乃

天体観測をしている最中、あまりの美しさに心を奪われたか、星河に身を投げて心中してしまいそうになったのだろうか。大胆不敵な表現と「死」のイメージが効いていて新しい。